様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月　４日現在

研究種目：　基盤研究（Ｃ）
研究期間：　2007～2008
課題番号：　１９５１０２４３
研究課題名（和文）　中欧におけるマイノリティの相対化と「ロマ」
—チェコ及びスロヴァキアの事例研究—
研究課題名（英文）　Relativization of Minorities in Central Europe and “Romany”: Czech and Slovak Cases

研究代表者
佐藤 雪野（SATO YUKINO）
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：　４０２２６０１４

研究成果の概要：「ロマ」を「ジプシー」の言い換えとすると、必ずしも共通の特徴やアイデンティティがある存在ではなく、「ジプシー」とは、しばしば他から貼られたレッテルであった。しかし、チェコやスロヴァキアでは、「ロマ」は、文化・言語・歴史などの共通性や共通のアイデンティティを持っているので、「ロマ」の集団への帰属は、自己規定と他からのレッテル貼りによるものとが共存し、近代的「民族」としての誕生も、他者との関係で創り出されるともいえる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００８年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：中欧地域研究
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：マイノリティ、ロマ、チェコ、スロヴァキア

１．研究開始当初の背景

「ロマ」は、世界各地に居住しているマイノリティである。「ロマ」を「ジプシー」を言い換えた呼称とすると、必ずしも一つのエスニック・グループとはいえなくなる。なぜなら、「ジプシー」は多種多様であり（水谷驍『ジプシー』平凡社、2006 年）、それと呼ばれる人々に共通のアイデンティティがあるわけではないからである。また、「ジプシー」という集団の括りは、しばしば他者から貼られたレッテルであった。

マイノリティは、数的に少数派であり、多数派より政治的・経済的・社会的に劣位であることが多いとされるが（吉川元、加藤普章編『マイノリティの国際政治学』有信堂、2000 年）、ロマは各地において、典型的なマイノリティであるといえる。

さて、最初の記述にもかかわらず、これまで、私は、エスニック・グループとしての「ロマ」に着目して、研究を進めてきた。なぜなら、チェコやスロヴァキアなどの中欧諸国に

限定してみると、そこで生活している「ロマ」は、文化・言語・歴史などの共通性を持ち、共通のアイデンティティを持っているため、一つのエスニック・グループといってよい存在だからである。

そもそもマイノリティとマジョリティは相対的なものであり、状況によってその関係は変化する。チェコやスロヴァキアの歴史を振り返っても、第一次世界大戦後のチェコスロヴァキアの独立により、ハプスブルク帝国下で支配的存在であったドイツ人やハンガリー人は独立国の下でマイノリティ化した。1993 年のチェコとスロヴァキアの分離・独立で、スロヴァキアにおけるチェコ人(*Češi na Slovensku*, Martin, 2000 参照)、チェコにおけるスロヴァキア人はマイノリティ化したことになる。

20 世紀以降のチェコやスロヴァキアにおいて、ある時にマジョリティであったものがマイノリティ化したり、その逆になったりする歴史が存在したが、「ロマ」は常にマイノリティであった。様々なマイノリティが相対的に捉えられる中で、今後も「ロマ」は絶対的にマイノリティであり続けるのだろうか、という開かれた問いが存在する。

２．研究の目的

上述の「様々なマイノリティが相対的に捉えられる中で、今後も『ロマ』は絶対的にマイノリティであり続けるのだろうか」という問題提起に基づき、20 世紀以降のチェコやスロヴァキアにおいて「ロマ」と他のマイノリティを比較し、「ロマ」の他のマイノリティには見られない特色を確認し、マジョリティとマイノリティの交代など、マイノリティの相対化が目立つ局面において、ロマにもその影響が及んだかどうかを検討する。

３．研究の方法

(1)文献等資料の収集と検討

中欧を中心に「ロマ」の文化・歴史・現状に関する文献等資料を収集し、その検討・分析を行う。特にチェコスロヴァキアにおいては、社会主義政権が崩壊した後の 1990 年以降、「ロマ」に関する研究文献が多く出版されるようになり、その傾向は 1993 年のチェコとスロヴァキアの分離以降も続いている。また、社会主義政権崩壊後、市場経済化に伴う社会矛盾の顕在化や言論・政治運動の自由の負の側面（差別的言動・運動さえも「自由」に行われるようになった）から、「ロマ」とマジョリティ社会の相克が顕著になり、その問題解決を目的とする研究も進んでいる。チェコとスロヴァキアの欧州連合加盟とその前提としての人権擁護の必要との関わりで、「ロマ」研究に西欧から多くの助成が行われたことも研究の進展に影響した。

「ロマ」やマイノリティに関する問題の歴史的変遷、現状を探るために、チェコ及びスロヴァキア関係の文献資料を幅広く収集し、検討する。それにより時代的・社会的背景と「ロマ」を初めとするマイノリティの状況の関連を考察する。

(2)海外調査―史・資料収集

(1)に関連して史・資料の収集のために、チェコやスロヴァキアの文書館、図書館、博物館を訪問する。チェコでは、プラハの国民文書館、スロヴァキアでは、ブラチスラヴァのスロヴァキア国民文書館などで、未公刊の史料を閲覧する。そのほかの公刊資料に関しては、プラハの国民図書館、ブルノ（チェコ）のロマ文化博物館、ブラチスラヴァの大学図書館及びスロヴァキア科学アカデミー社会学研究所で閲覧する。

(3)海外調査―インタビュー

現代のロマの教育に関して、学校、教育行政、支援団体(NGO)関係者のインタビューを行う。比較の対象として、ユダヤ関係者のインタビューもプラハで実施する。

４．研究成果

「ロマ」と共通項の多い「ユダヤ人」と比較すると、両者には、
(1)共にナチ・ドイツに迫害され、強制収容所で虐殺されたこと、
(2)迫害・差別の長い歴史があること、
(3)マジョリティ・グループとの長期間の接触にもかかわらずマイノリティとしての独自文化を維持し続けていること、
(4)国家なき民としての歴史が長いこと
などの共通性が存在する。

しかし、他方、
(1)「ユダヤ人」は、現在イスラエルという国家を得ているが、「ロマ」は国家を形成していないばかりか、国家形成をめざす動きも歴史的にみてもほぼ皆無といってよいこと、
(2)「ユダヤ人」は、政治・経済・文化など様々な分野で世界的な著名人を輩出してるが、「ロマ」では稀なこと、
(3)「ユダヤ人」は早くからマジョリティの国家の枠組に組み込まれたが、「ロマ」は常に枠外であったこと、
(4)「ユダヤ人」にとってはユダヤ教という宗教が求心力となったが、「ロマ」には共通の宗教がないこと、
(5)「ロマ」は文字を持たなかったこと

などの相違点も存在する。

中欧において、両者は、マジョリティから「犯罪者」というレッテル貼りに基づく迫害を受けることもあった。両者とも、その集団への帰属は、自己規定によるばかりでなく、他からのレッテル貼りによることもあった。近代的「民族」としての誕生も、他者との関係で創り出されるともいえるだろう。

上述のように、20 世紀以降のチェコやスロヴァキアにおいて、ある時にマジョリティであったものがマイノリティ化したり、その逆になったりする歴史が存在したが、「ロマ」は常にマイノリティであった。様々なマイノリティが相対的に捉えられる中で、今後も「ロマ」は絶対的にマイノリティであり続けるのだろうか。それとも、「ロマ」も相対的にマイノリティと規定されてきたのであろうか。「ロマ」がマジョリティとなる社会の中では、「ガジョ＝非ロマ」がマイノリティであることを、改めて「ガジョ」である私達は認識すべきであろう。そのために、「ロマ」とは何かを常に問い直す必要があるだろう。

「ロマ」社会に入ったマイノリティである「ガジョ」は、婚姻関係により「ロマ」社会に入った例が多いため、摩擦は少ない。つまり、「ロマ」男性と結婚して「ロマ」社会に入った「ガジョ」女性（「ロマ」女性と結婚して「ロマ」社会に入った「ガジョ」男性の例は少ない）は、「妻」として「ロマ」社会に受け入れられ、特にマイノリティとして区別・差別されたわけではないようである。種々の回想から得られる彼女達の姿は、むしろ新しい知識・技術を持っているコミュニティ内の人間として重宝されてきたことが伺われる。

昨今、チェコやスロヴァキアのみならず、西欧や日本においても「ロマ」が注目され、様々な研究が発表されている。最近の西欧での代表的な研究成果として Zoltan Barany の *The East European Gypsies* (Cambridge, 2002)があげられる。ハンガリー出身の在米政治学者が、歴史的視点も含めて「ロマ」をめぐる諸制度を検討した力作である。

また、「ロマ」は文字を持たなかったため、「ロマ」の歴史は、マジョリティによる記録を史料として用いなければならなかった。そのような史料は客観性を欠く場合も多いので、利用する研究者の力量が試されることになる。新しい時代に関しては、マジョリティ側の史料の欠点をオーラル・ヒストリーが補うことができる。その意味で、社会主義政権崩壊後、Ctibor Nečas の *Nemůžeme zapomenout* (Olomouc, 1994)などのオーラル・ヒストリーの出版が進んでいることは好ましい状況である。

また、スロヴァキアの「ロマ」作家 Irona (Elena) Lacková の口述の自伝 *Narodila jsem se pod šťastnou hvězdou* (Praha, 1997)は、20 世紀のスロヴァキアとチェコの「ロマ」社会の状況、マジョリティ社会との関係を生き生きと描いた第一級の史料でもある。

今日では、「ロマ」系の研究者の活躍ぶりも注目に値する。マジョリティにより構成された「ロマ」の歴史を一旦「ロマ」自身の手に取り戻す必要があるからである。Bartoloměj Daniel の *Dějiny Romů*(Olomouc, 1994)に始まったチェコにおけるその動きを、現在は *Kapitoly z dějin Romů*(Praha, 2002)の著者であり、ブルノのロマ文化博物館長 Jana Horváthová が中心的に担っている。

さて、現実には、「ロマ」とマジョリティの共生の実現が必要である。そのためには、双方の教育が重要である。なぜなら、マジョリティの間で「ロマ」の失業率や犯罪率が常に問題視され、それがマジョリティの「偏見」を助長しているが、それらの要因となっているのが「ロマ」に学歴や資格のないことだからである。カナダに移住したチェコの「ロマ」が、「ここでは誰も職業訓練資格証明書を持っているかなど聞かずに雇って、見習いから始めさせてくれる」と発言しているのは象徴的である。チェコやスロヴァキアの学歴社会・資格社会も「ロマ」の就職を困難にしていることがわかる。

スロヴァキアの三都市の４つの学校の「ロマ」の子供たちの学校教育の現場を調査した結果、基礎学校ゼロ学年（就学前教育を受けていない子供を対象とした１年生の前段階のクラス）は導入されていなかった学校もあったが、「ロマ」教育助手（スロヴァキア語の理解が困難な「ロマ」の子供の援助をする。実際には「ロマ」以外の子供に対する援助もしている）は調査したすべての学校に配置され、彼らの活動は成果をあげていることがわかった。

また、スロヴァキアでは、「ロマ」というエスニック･マイノリティを援助することと社会的にハンディキャップを持っている子供を援助することが同時に意図されており、力点はむしろ後者におかれている印象であった。つまり、「ロマ」がエスニック･マイノリティだから援助するのではなく、社会的弱者であるから援助するということである。更に言い換えれば、社会的弱者の保護を行ったら、たまたまその弱者は「ロマ」だったということになり、このことからは、「ロマ」はエスニック･マイノリティというよりは、社会階層であるかのようにみえる。しかし、具体的な教育の事例を見ると、「ロマ」の子供の教育困難の理由には、彼らのスロヴァキア語能力のレベルや、価値観の相違があり、特に前者は、「ロマ」の教育問題解決に関しては、エスニック的な視点が必要であることも示している。

その後スロヴァキアで教育予算が切り詰められた結果、４つの学校のうち単独で残っているのは１校になってしまった。それが共通通貨ユーロ導入のための財政赤字解消によるものであれば、残念なことである。

限られた予算の中で効果的な教育を行うためには、家庭教育も必要になる。「ロマ」は若年で母親になる例も多く、母親教育が重要であろう。これまでLacková、Horváthováを初め、「ロマ」の知識人女性は母親が「ガジョ」である例が多い。このことは、逆説的に「ロマ」の母親教育が必要であることを示している。

この研究の特色は、他のマイノリティと比較して「ロマ」の特色を明らかにすることとマジョリティとマイノリティを相対的なものとみなした上で「ロマ」とマジョリティ社会の関係を検討することにある。「ロマ」を問題にすることは、必ずしもエスニック・マイノリティの問題ばかりでなく、社会的階層の問題とも深く関わることが明らかになった。つまり、「ロマ」はエスニックな意味だけでなく、社会的弱者という意味からもマイノリティとして扱われるべき存在であるとされているのである。

Lackováは現在プレショウ市営墓地に眠っている。東スロヴァキアという「ロマ」の姿の目立つ地域にもかかわらず、大都市であるためかプレショウ市自体のロマ人口の割合は意外にもそれほど多くない。しかし、周辺（市外も含め）に多くの「ロマ」集落をかかえるだけに、教育上のいろいろな試みがなされている。

そのプレショウ近郊でのLackováの経験によれば、戦間期にはスロヴァキア系と「ロマ」よりも、チェコ系やユダヤ系と「ロマ」というマイノリティ同士に共感が生まれていたことが注目される。スロヴァキア系と「ロマ」の関係は良好ではなかったものの、完全に破綻したのは、独立スロヴァキア共和国ができる直前のことであった。第二次世界大戦後の社会主義政権下では、名目的には、「ロマ」と「非ロマ」の平等が実現した。

そして、1990年代に表出した両者の摩擦は、双方の努力により一旦沈静化する方向が見られたものの、昨年来の経済危機下で極右の活動が活発化し、「ロマ」に対する襲撃がみられるようになった。それに反対する市民運動が見られることが救いではあるが、歴史的にみて、経済状況と民族問題は密接に結びついており、予断を許さない状況である。今後の推移を観察しつつ、共生の鍵を見出す研究を続けていく必要があろう。

また、2008年に邦訳が出版されたマッキャンColum McCannの小説『ゾリ Zoli 』は、スロヴァキアを舞台に「ロマ」の女性詩人を主人公とし、第二次世界大戦後の「ロマ」と「非ロマ」の関係を生き生きと描いている。このような作品が生まれたことは、「非ロマ」の立場から「ロマ」に正面から取り組む文学的視点が育っていることを示しており、検討に値しよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７件）

① Yukino SATO, “Předválečné Japonsko očima Čechu - pohled českých cestopisů” *Historie a cestovní ruch. Perspektivní a podnětné spojení* (Praha:VŠO), 2009, 印刷中、査読無

②Yukino SATO, “Češka, která cestovala do Japonska na začátku 20. století”, *Cestování včera a dnes*, 5-1, pp.10-11, 2008, 査読有

③佐藤雪野「経済の現状―計画的に作り出された市場経済は機能しているか」薩摩秀登編著『チェコとスロヴァキアを知るための 56 章』第２版、明石書店、134-139 ページ、2008 年、査読無

④佐藤雪野「伝統と現在を貫くチェコ共和国の人づくりと学び」『学思』第４号、10-11 ページ、2007 年、査読無

⑤佐藤雪野「オーラル・ヒストリーとチェコ現代史」『歴史と地理：世界史の研究』第 211 号、55-58 ページ、2007 年、査読無

⑥佐藤雪野「チェコスロヴァキアにおけるロマの歴史とオーラル・ヒストリー―ラツコヴァーの自伝を手がかりに―」『国際文化研究科論集』第 15 号、65-79 ページ、2007 年、査読有

⑦佐藤雪野「レンカ・ライネロヴァーの経歴と作品」『東北ドイツ文学研究』第 50 号、197-206 ページ、2007 年、査読有

〔学会発表〕（計　２件）

①佐藤雪野「ロマと非ロマの共生―スロヴァキアとチェコの事例」第２回ロマ（ジプシー）シンポジウム、2009 年３月 15 日、国立オリンピック記念青少年総合センター

②佐藤雪野「マイノリティの歴史とオーラ

ル・ヒストリー及び回想録 ― チェコスロヴァキアのロマの事例 ―」日本西洋史学会第58回大会、2008年5月11日、島根大学

〔図書〕（計　１件）

①佐藤雪野『中欧におけるマイノリティの相対化と「ロマ」―チェコ及びスロヴァキアの事例研究―』（報告書：東北大学）、全 62 ページ、2009年

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤 雪野（SATO YUKINO）
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：４０２２６０１４

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし